

地歴最新資料

第25号

INDEX

- 特集①** 新課程「歴史総合」で日本人の海外移住を学ぶ…………… 2
JICA 横浜 海外移住資料館 森田 千春
- 特集②** 良い意味で“中途半端”なハイブリッド型授業実践
～一斉講義の知識を材料にしたAL～ …………… 7
近畿大学附属広島高等学校・中学校福山校教諭 奥田 幸昌
- 特集③** 地理総合へ向けた「国際理解と国際協力」の授業実践
～生徒の主体的・対話的で深い学びを目指して～……………12
桜美林中学校・高等学校教諭 西 克幸

▶バオバブの木(ザンビア・チルンドゥ地区) ザンビアの In'gombe llede(インゴンベ・イレデ)遺跡にあるバオバブの木。In'gombe llede は英語で the sleeping cow を意味し、バオバブの木が眠っている牛に見えることから、この遺跡の名前が付けられた。



JICA 横浜 海外移住資料館 森田 千春

1. はじめに

日本人の海外移住は150年以上の歴史を重ね、現在(2019年)、海外で生活する移住者やその子孫の日系人の数は360万人以上です。一方日本では近年、就労や勉学を目的に30万人を超える日系人とその家族が来日し生活しています。近代以降の日本から海外への人口移動は、「日本史」と「世界史」の垣根を外してこれらを一体的に学ぶことをねらいとして2022年度からの高等学校学習指導要領で新設される「歴史総合」に適した学習テーマであると考えます。

また近年の日本では外国にルーツを持つ子供達が増えており、中でも中南米出身の日系人の来日および定住により日系ルーツにゆかりのある子供達の数が増加しています。さらに出入国管理及び難民認定法(入管法)改正等により、より多くの国から様々なルーツを持つ外国籍市民を日本に迎え入れる社会状況になっています。こうした状況の中で近現代の日本人の海外移住について学ぶことは、外国籍児童・生徒・市民との共生が身近な課題となっている今日の社会のなりたちを正しく理解する鍵となり、歴史教育がその役割と使命を発揮できるテーマであると思います。

上記のことから2022年度に始まる新課程「歴史総合」で日本人の海外移住を題材に、海外における日本人移民の移住先の国づくりへの参加および苦難と貢献の歴史を学び、これからの多文化共生のあるべき姿について考えることをご提案します。

まずJICA横浜海外移住資料館の概要をご紹介します。各校の校外学習や修学旅行でのご来館、もしくは教材貸出やホームページ上の資料活用等をぜひご検討下さい。

次に具体的な学習活動案をご紹介します。テーマには第二次世界大戦後に困窮していた日本に海外の日系社会から届いた救援物資「ララ物資」を取り上げました。

日本人の海外移住の歴史に関する展示・研究・教育の拠点である本資料館を通じ、移住者達が苦難の中で移住先国の発展に貢献して現地での信頼を得てきたことや、海外の日系社会と日本との間で築かれてきた絆について、ぜひ若い世代に知っていただきたいと思います。

日本もたびたび海外から支援の恩恵を受けてきたように、人や国をつくるための国際協力は決して一方向ではなく双方向のものであること、そしてそれは双方の間に信頼の絆を築いていくものである、というメッセージがより多くの方々に伝わることを願っています。

2. JICA 横浜 海外移住資料館(神奈川県横浜市)

概要

JICA横浜海外移住資料館は南北アメリカを中心とした日本人の海外移住の歴史および移住者と日系人の現在をテーマにした資料館です。

独立行政法人国際協力機構(JICA)は開発途上国を対象とした国際協力を実施している日本政府のODA実施機関で、前身組織の一つは戦後、主に中南米への移住事業に携わっていました。移住事業は既に終了していますが、JICAでは現在まで中南米の日系社会と日本を繋ぐ事業を継続しています。日本の海外移住の歴史および移住者と日系人の現在の姿を多くの人々に知っていただくため、2002年に移住船出港地の一つであった神奈川県横浜市に海外移住資料館を開館しました。

参考：海外移住資料館 <https://www.jica.go.jp/jomm/>

展示室

展示では中南米と、それに先行するハワイを含む北米への移住を主な対象としています。展示解説ボランティアによる説明を聞きながら見て回ることができます。

① 海外移住の歴史

日本における海外移住の歴史を5期に分け、年表、文献、写真、映像によって、各時代の重要な出来事を明治から近年に至るまでの日本の海外移住の歩みを示しています。



▲写真1 常設展示室(移住の歴史ゾーン)

● I期(1853～1884年)

外国人に雇われて海外渡航をする人が現れた時代。当時サトウキビ産業が盛んなハワイでは多くの労働力を必要としており、ハワイ政府と江戸幕府の交渉の結果ハワイ移住が募集されました。出航直前に明治新政府が成立したため明治元年(1868年)の出航となり、この時にハワイに移住した人々は「元年者」と呼ばれ、日本から海外に集団渡航し

た初めての例になりました。日本初の旅券である「御免の印章」からは現代のような写真付きの旅券がない時代にどのように本人であることを証明して海を渡ったのか、初期の海外移住の様子を想像することができます。

●II期(1885～1907年)

海外への渡航が本格化し始めた時代。代表的な移住の例として、日本とハワイ王国の政府間で結ばれた「移民協約」によってハワイに渡り、サトウキビ・プランテーション(農園)で働いた「官約移民」や、勉学のために北米へ渡った「書生」等が挙げられます。こうした人々が次第に定住化し、アメリカでは排日感情が高まりつつありました。主に広島、山口、熊本、福岡の4県の農村出身者が、移住したハワイのサトウキビ・プランテーションでどのように働いていたのか、移住者の仕事歌である「ホレホレ節」を聞きながら当時の様子を知ることができます。

●III期(1908～1940年)

1907-08年の日米紳士協定により、アメリカでは親族の呼び寄せ以外の移民の形は停止されました。その後も排日感情は治まらず1924年の移民法により日本人のアメリカへの移住は全面的に禁止されることになりました。

アメリカへの移住規制と日本国内の人口増加からブラジルを始めとする南米への移住が増加しました。南米移住の特徴は、多くが家族移住で、定着を意図した移住地が計画されるようになりました。展示では代表的な例であるブラジル・アリアンサ移住地で「コーヒーをつくるより人をつくれ」という高い理想を掲げて森林を伐採し、山を焼き、農業を営んだ開墾の様子がわかります。

●IV期(1941～1945年)

第二次世界大戦により、日本人の海外移住は中断されました。北米に移住していた日本人は敵性外国人とみなされ、強制立ち退きや収容の対象となり、中南米の一部でもこのような事態が見受けられました。強制退去命令の公布広告、強制収容所の風景を通じて、戦時下の海外移住者とその家族が直面した苦境を窺い知ることができます。

●V期(1946～1999年)

戦後、荒廃した日本の窮状を救うためにLARA(アジア救済公認団体)を通して北米・南米の日系人から救援物資(ララ物資)が送られました。1952年には移住が再開され、最後の移民船「にっぽん丸」が1973年に渡航するまでの間、多くの人々が海外へ移住しました。その後、日本の高度経済成長に伴い海外移住は衰退していきました。アメリカで作成された「日本行慰問品目録」やララ物資の写真から、祖国日本を救済しようと奔走した海外日系人の方々の温かい思いや結束力を知ることができます。

2 「われら新世界に参加す」

次の6つの問いについて考えながら、新世界の文明創造に参加した日本人の足跡と現在について理解します。

Q1. なぜ海外へ行ったのか?

→個人、時代、地域によって理由は様々ですが、代表的な例は、

出稼ぎや呼び寄せでした。移住者を募集するポスターや移住案内書から、移住者が新天地に馳せた希望を感じることができます。

Q2. どうやって行ったのか?

→移住するにあたって、横浜や神戸の波止場周辺にあった移住宿(後には移住斡旋所)で日本を出発する手続きを行い、船で新天地へと向かいました。移住する人々が荷造りした品々から、当時の日本や移住者達の生活や文化を知ることができます。



▲写真2 常設展示室(移住者の携行荷物)

Q3. どんどころへ行ったのか?

→初期移住者は農業従事者として大規模農場や未開の土地へ向かいました。ハワイや北米では契約労働の後、商売活動に転じて都市にも進出しました。南米では、農業主に雇われて働く形態から未開地を開墾して自身が農場主となって経営していく形態へと変わっていき、移住地が形成されていきました。トラックの荷台に乗って移住地へ移動する移住者達の写真や移住地の模型・映像を通して、移住先の様子を知ることができます。

Q4. 南北アメリカの移住先でどのような仕事についてのか?

→当初はサトウキビ農園やコーヒー農園で契約労働に従事しました。後に、独立農を目指したり、都市に出て商業やサービス業等に転じたりして、職業は多様化していきました。特に、ジュート(黄麻)やコショウ栽培で目覚ましい成果をあげました。コーヒー豆やコショウの収穫の展示から、移住先で移住者達が日本で馴染みのなかった作物の栽培に挑戦し、成功に至った状況を知ることができます。



▲写真3 常設展示室(農機具展示)

Q5. どのような暮らしをしていたのか？

→移住者達は日本的な伝統を残しながらも現地の生活様式に適應していきました。食文化では、日本食と海外の食事が融合した料理が誕生しました。日系人の食卓の展示では移住地の食材を加工した日本風の料理や現地の料理と合体したものが見られます。

Q6. どのようなコミュニティを作ったのか？

→日本人は自らのアイデンティティに基づくコミュニティを形成していきました。その主な例が、日本人会・婦人会・宗教団体です。特に日本人会は、最も基本的で重要な団体でした。日本語学校や病院、日本語新聞等も作られ、移住先でも日本の文化が保持されました。日本語学校で使用した教科書や日本語で発行された新聞から日本人コミュニティの様子を知ることができます。

3 ニッケイ・ライフ・ヒストリー

移住した日系人の生活の様子を展示しています。6世まで誕生したハワイの一族の記念写真からは移住者とその子孫達が移住先の歴史に刻んできた足跡を感じることができます。

4 日本の中のニッケイ・世界の中のニッケイ

日本文化に基づいた日系社会独自の文化を紹介しています。カナダのワイン樽から作られた和太鼓の展示等から、日本文化が海外で日系人を通して普及・継承されている様子を知ることができます。また日本に住む中南米出身の日系人が出身国の文化にちなんだ祭りやイベントを行う様子も知ることができます。

5 デジタル移住スペース

設置してあるパソコンを使って移住についての情報を閲覧できます。海外移住に関する調べものは、このPCスペースでのデータ検索の他、同じフロアにある閲覧室で資料や文献を閲覧することができます。海外移住について学ぶ児童・生徒の他、移住した祖先の記録等自身のルーツを探す日系人の姿も見られます。



▲写真4 常設展示室 (PC調べもの・学習コーナー)



▲写真5 閲覧室 (海外移住関連の文献・資料)

企画展示・イベント

年に3回ほど企画展とそれにちなんだ公開講座を実施しています。「ペルー」や「ボリビア」等特定の国をテーマにしたものや、移住者とコーヒー、あるいは野菜等、特定分野のトピックを取り上げたもの、移住者を多く送り出した都道府県のご協力を得てその都道府県からの移住や移住者をテーマとしたもの等があります。これまでに実施した都道府県は沖縄、和歌山、福岡、広島、高知、熊本で、今後も継続していきたいと思っています。

企画展示や公開講座の他、関連した映画上映、音楽演奏会、子供向けの季節毎のイベント等を実施しています。



▲写真6 企画展示室 (熊本県移民の歴史)

教材や資料の貸出

海外移住や日系社会について楽しく学ぶための教育教材 (DVD, かるた, 紙芝居, すごろく, トランク教材) の貸出を行い、イベントや授業でご活用いただいています。また、資料 (画像, 図書, 映像, パネル, 標本) の貸出では他の資料館での展示, NPO でのイベント, TV 番組の制作等にご活用いただいています。



▲写真7 ハワイ移民労働着 (貸出教材「いみんトランク」の一部)



◀写真8 資料館を利用した
指導教案の作成参考資料

参考：学習プログラム（海外移住資料館）
<https://www.jica.go.jp/jomm/education/index.html>

訪問学習プログラム

資料館ガイドボランティアによる解説付きの資料館見学の他、JICA ボランティアの体験談を通じて国際協力やJICA の活動について知ることができる開発教育講座をご用意しています。年間9,000人以上の児童・生徒の皆さんや社会人グループにご利用いただいています。先生方からは「既存の教材では指導しにくい海外移住というテーマについて効果的に学ぶことができ有効だった」、児童・生徒の方々からは「日本人が昔海外に移住していたことを初めて知った」、「海外や国際協力について興味を持つことができた」等、好評をいただいています。



▲写真9 校外学習生徒（ガイドボランティアによる解説）

参考：JICA 横浜訪問プログラム
<https://www.jica.go.jp/yokohama/enterprise/kaihatsu/houmon.html>

3. 資料館を活用した学習活動の提案

1 学習テーマ ララ物資と海外日系社会

2 教科領域との関連性

- ・歴史総合 「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、
「グローバル化と私たち」
- ・日本史探究 「近現代の地域・日本と世界」
- ・世界史探究 「諸地域の結合・変容」
- ・総合的な探究の時間

3 実施時期および総時数

時期：近現代史の中で扱う。

時数：単元や指導形態に合わせて弾力的に運用する。

4 単元（学習）目標

- ・第二次世界大戦中、北米や中南米の一部の国では日系一

世だけでなく現地の市民権を持つ日系二世も敵性外国人とされ、強制収容所に送致されたり、厳重な監視下におかれて困難な立場にあったことを理解する。

- ・第二次世界大戦直後、食料や衣料を始めとする生活必需品の入手が困難だった日本の状況を理解する。
- ・戦後、強制収容所から戻り財産を失ってゼロからスタートした北米の日系人達が、食糧不足に苦しむ祖国日本を救済する募金運動を始め、それが中南米の日系社会にも広がったことを知る。
- ・東日本大震災の後にも、海外各地の日系社会から多くの支援が届けられたことを知る。

5 単元について（教材観・単元設定の理由・資料館活用 の視点等）

2022年度から始まる「歴史総合」の学習内容のポイントは「世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えて、近現代史を理解」、「課題の解決を視野に入れて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察」、「歴史の大きな変化に着目し、問いを設け、資料を活用しながら歴史の学び方を習得」することとされている。

本学習では日本人の海外移住の歴史を通じて送り出し国である日本と受け入れ国である北米・中南米を相互的な視野から捉えて近現代史を理解することができる。特に「ララ物資」に着目し、第二次世界大戦後に海外在住の日系人達から祖国日本にどのように救援物資が送られたのかについて、資料を活用しながら学ぶ。さらに、国内に居住する在日日系人を始めとする外国人材を視野に入れ、外国人材の受け入れを開始した日本の政策や外国人との共生社会の構築に向けた課題を考察する。

ララとは「Licensed Agencies for Relief in Asia」（アジア救済公認団体）の頭文字をとった略称 LARA のことである。ララは1946年、祖国日本の窮状を救済しようと立ち上がったアメリカの日系一世がアメリカ中の日系社会に呼びかけた募金活動を発端にキリスト教団体や社会事業団体等13団体が加盟して組織された。その後、アメリカだけでなくカナダ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン等からも救援物資がとりまとめられ、1946年から1952年までにミルク類、穀物、缶詰、バターやジャム等の食料品を始め、衣類、医薬品、靴、石鹸、学用品の他、乳牛やヤギ等16,000トン以上の「ララ物資」が届けられた。その総額は当時のお金でおよそ400億円を超え、そのうちの20%が日本を救おうと立ち上がった海外在住の日本人、日系人からの善意の贈り物であった。ララ救援物資活動に貢献した日系団体は36団体にのぼるとされている。

こうした海外日系社会と日本の絆は現在まで強く受け継がれており、2011年の東日本大震災でも海外各地の日系社会から多くの義援金や支援が届いた。パラグアイの日系社会からは日系農協の組合員によって大豆100トンが提供され、協力を申し出た日本の会社がこれを豆腐に加工して、被災地に100万丁の豆腐が届けられた。

6 学習計画

① 事前学習

- ・日本人の海外移住の歴史および海外の日系社会を知る。
- ・第二次世界大戦中の日本と北米や中南米諸国との関係について調べる。
- ・第二次世界大戦中の北米や一部の中南米で、なぜ日系人が「敵性外国人」として強制収容所での生活を強制されたのかについて調べる。
- ・戦後の困窮状態の日本に海外の日系社会から届けられた救援物資（ララ物資）について調べる。
- ・1970年代以降、アメリカで日系人の収容に対する補償と権利回復を求める運動が盛んになったことについて調べる。

② 資料館見学

- ・第二次世界大戦中の日系人の取り扱いに関する展示品や解説パネルを探し、その内容をメモする。
- ・証言映像を視聴し、その内容をメモする。
- ・東日本大震災の後にパラグアイから届けられた大豆による「豆腐100万丁」についての展示を知る。
- ・ララ物資を積んだ船が横浜港に到着したことを示す記念碑を見学する（資料館から徒歩5分）。

③ 事後学習

- ・資料館でのメモをもとに、グループでディスカッションをする。
- ・資料館でわかったことをもとに海外の日系社会に関する発表やレポート作成を行う。
- ・日本国内で暮らす在日日系人について調べ、在日日系人達がどのように日本に貢献しているか、またどんな問題や困難を感じているかについて調べ、ディスカッションを行う。在日日系人と交流の機会を持つ。
- ・在日日系人との交流の機会を創り、気づいたことを発表する。
- ・海外移住や日系人に関する他の博物館・資料館や史跡を訪問し、レポートを作成する。
- ・JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストに応募する。

参考：国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト
<https://www.jica.go.jp/hiroba/program/apply/essay/>

7 評価

- ・日本人移住者の歴史的経験を理解できたか。
- ・第二次世界大戦中の日本と南北アメリカとの関係を理解できたか。
- ・現在まで続く海外の日系社会と日本との繋がりについて理解できたか。
- ・在日日系人を始めとする外国人住民の日本社会への貢献を知り、多文化社会に生きる自分のあり方を考えることができたか。

8 授業づくりのための参考資料

- ・浅野七之助著『在米四十年—私の記録』（有紀書房、1962年）
- ・外務省ホームページ「ODA ちょっといい話 第二話 戦後の灰燼からの脱却」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/hanashi/story/1_2.html
- ・森茂岳雄著『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』（明石書店、1999年）
- ・ドロシー・マツオ著、新庄哲夫訳『若者たちの戦場—アメリカ日系二世第442部隊の生と死』（ほるぷ出版、1994年）
- ・海外移住資料館だより（2011年特集号）
https://www.jica.go.jp/jomm/newsletter/tayori23_01.html
- ・海外移住資料館だより（2014年夏号）
<https://www.jica.go.jp/jomm/newsletter/pdf/DayoriVol135.pdf>

4. おわりに

JICA 横浜 海外移住資料館を活用して海外移住を教材に歴史を学習することを提案しました。実際に横浜の資料館に足を運ぶことができない地域の学校でも、教育教材の貸出、資料館ホームページ上のデジタルミュージアムや資料館を活用することで海外移住について関心を持つことができると思います。また、国内各地の海外移住に関する博物館や史跡、NPOによる在日日系人との交流会等から近隣にある海外移住に関連するものを探してみることもよい学習の機会になると思います。海外移住の歴史を学んだ生徒達が多文化共生社会の担い手となってくれることを願っています。

●政府・JICA 提供のおすすめオンライン学習コンテンツ●

【映像で中南米・日系社会を知る】

- ・日本人移住や日系人の説明（当資料館映像あり）「Nikkei History」
https://www.youtube.com/watch?v=Zdz6CjWj3lg&list=PLoj1Ym89bkat5_5SGktOD0GqgaQPFLI0Z&index=9
- ・中南米の日系社会「VIVA 中南米！ 深まる絆」
<https://www.youtube.com/watch?v=78Uy2vQKM4Y>
- ・ペルーの日系社会「日本の元プロ野球選手が子供たちへ野球教室」
<https://www.youtube.com/watch?v=YHmuuOgrQB4>
- ・アマゾンでの日本人移住者の貢献「アグロフォレストリー 森をつくる農業」
<https://www.youtube.com/watch?v=HmFxn0iwXHO>
- ・パラグアイ移住の記録写真集「パラグアイへの日本人移住の歴史」
https://www.youtube.com/watch?v=_r9pD8Zwg-4
- ・その他、国際協力全般（JICA 地球ひろば）
<https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/index.html>

良い意味で"中途半端"なハイブリッド型授業実践 ～一斉講義の知識を材料にしたAL～

近畿大学附属広島高等学校・中学校福山校教諭 奥田 幸昌

1. はじめに

学校現場の歴史教育は、通史を系統的な知識体系として教員が教える従来の一斉講義型授業から、ファシリテーターとしての教員のもとでのAL(アクティブ・ラーニング)に代表される生徒参加型の能動的授業へと変化が起り続けている。しかし、受験を第一に、培ってきた豊富な知識と経験があるからこそ、あえて教えないで生徒に考えさせる要素が強くなるALに対して一步踏み出せない教員も多い。私は、受験に対応しながら限られた時間の中で従来の一斉講義型授業で身に付けた知識を軸に、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力を含めて21世紀型の生きる力を伸ばし、主体的・対話的で深い学びになるような実践を目指して行ってきた。その際、近年の国公立大学二次試験の特徴である、史料の読み取り(史料から何を考察すべきか、抜き出すべきかを理解できる)、歴史的意義の理解(歴史の流れや系統的な知識体系を押さえたうえで出来事の意義を考えられる)、時代像の捉え方(どんな時代だったのかイメージできる)の3点も検討している。

4つのコース(レベル別の進学コースと体育特科コース)に分かれ、進学先も様々(それぞれ3割が国公立、附属校、他私立・専門に進学する)な幅広い層が在籍している本校において、「授業内で身に付けた知識などを材料にして料理をする」、これまでの授業とこれから求められる力の良いところ取りをしたハイブリッド型のAL実践例の中から、授業1コマ中の15～30分という時間で気軽に行え、全体的に生徒の反応が良かったものを4つ紹介する。

2. 実践例①楽市令の真実とは！？～損した人と得した人～

1) ねらいと展開概要

①ねらい

戦国期の富国強兵策の楽市令については、生徒は肯定的な印象を持っているが、あえて否定的にも考察することで、広い視野と異なる観点から見る力を鍛えつつ、歴史的意義と当時の時代像の理解を目指す。楽市令によって変化した社会を考えることで、それまでの社会とも比較できる。

②展開概要(15～25分)

まず、楽市令を座に代表される伝統や既得権益を打破したのものとして肯定的に捉えてみる。次に視点を換え、楽市令によって利権を失ったものや迷惑を被ったものもいたことに気づかせて否定的にも捉えてみる。そして楽市令についてまとめる。

2) 流れ・注意点・考察内容

①生徒が肯定的に考察

楽市令は生徒も聞いたことがあるため、意見が出やすい。

・商売が繁盛する。人が集まる。宿屋が儲かるから宿を増築しないといけないため、労働者が必要になる。安土にいれば仕事があるから人が集まる。人が集まるから兵士を雇える。安心して商売ができる。

②これまでの授業内容について問いかける

中世の商業の特徴は？当時の商人たちを困らせていたのは？などと問いかける。

・座の特権がなくなることで、外から多くの商人が集まる。徳政令が適用されないので商人は安心してお金を貸すことができ、市場が活性化する。

③生徒が否定的に考察

視点を換え、楽市令で損した人はいないかを投げかけると意見が出やすい。

・中世の商業の主役である座からすると楽市令で特権を失った。安土城下に用がなくてもいけない。目的地への遠回りになるかも。

④楽市令について生徒がまとめる

自由に移動させ、意見交換をさせる。最低3人とワークシートを交換し、サインをもらう指示を出すと意見交換が活発になる。肯定・否定それぞれの考察を踏まえ、他の人の視点・意見も参考にして楽市令について文章でまとめる。

楽市令の真実とは！？～損した人と得した人～

楽市令の内容を考察し、どんなメリットとデメリットが生まれたのか考えてみよう！！

楽一令

定 安土山下町中

一 当所中楽市として仰せ付けらるの上は、諸座・諸役・諸公事等、悉く免許の事。

一 往還の商人、上海道は之を相留め、上下共当町に至り寄宿すべし。……

一 伝馬免許の事。

一 分国中徳政、之を行ふと雖も、当所中は免除の事。

一 喧嘩口論并に國貨・所質・押質・押売・宿の押借以下、一切の停止の事

天正五年六月日

口断

安土城下の町中に対する定

一 この地に対して楽市を命じた上は、いろいろな座の特権・座役・座の権限などは、すべて免除する。

一 往來する商人は、上街道を通ることを停止して下海道だけに、都へ上り下る商人はこの町に宿泊させよ。

一 伝馬役は免除する。

一 領内内で徳政を実施しても、この場所では免除する。

一 喧嘩・口論ならびに國貨・所質・押し売り・宿の押し借りなどは、一切禁止する。

メリット:

楽市令まとめ:

デメリット:

▲授業プリント

⑤全体で振り返り

生徒を指名して答えてもらうか、事前に机間巡視でいくつかの意見をタブレットで撮影しておきプロジェクター等

で全体に共有して振り返りを行う。その際、商売の活性化・座や徳政令の否定といった内容を最低条件にし、字数制限を設けると国公立大の二次試験対策としても有効である。

3) まとめ

①史料の読み取りについて

史料によって時代状況を理解するほか、肯定的な見方だけでなく、否定的な見方でも考察することで、批判的な思考を促し、広い視野と異なる観点から見る力が鍛えられる。

②歴史的意義の理解

築市令からは、伝統や秩序を否定して新しい支配体制を作ろうとした歴史的意義が理解しやすい。補足として、「信長は関所を廃止して交通を整備し、公家・寺社などが納めさせた税を否定し、物資の大量輸送を円滑化して商業の発展を促そうとした」点も説明すると、商業の重要性を理解していた信長の先進性が伝わりやすくなる。一方で、信長は美濃加納と安土といった城下町以外では座を保護し、関所の存続を認めた地域もあり、旧来の特権も認めている。こうした部分に信長の現実主義的なバランス感覚の良さ、為政者の表と裏が見受けられる。

③時代像の捉え方

近世社会を形作っていった信長の政策と比較することで、座の特権やよそ者の排除に代表される、それまでの中世の閉鎖的な時代のイメージが読み取りやすくなる。

3. 実践例②大津事件は大事件だった! ? ~正義と正義の激突~

1) ねらいと展開概要

①ねらい

日本が不平等条約を抱える中で起こった大津事件については、児島惟謙が司法の独立を守ったという点で評価される。しかし、当時の松方らの政府首脳たちは皇室に対する犯罪として津田を死刑にしようとする意向があり、大國ロシアからの領土割譲要求や最悪の場合開戦もありうるという危機感を政府が持っていたことも忘れてはならない。そこで授業内容の復習として当時の世界と日本の状況を理解し、政府と児島それぞれの思惑を考察し、立場が変われば正義が異なるという価値観について学ぶ。歴史的には児島の判断が世界から評価されたが、正解のない答えとして、それぞれの思惑を考察し、自分なりの答えとして説得力のある理由をつけて支持する立場を決める。

②展開概要 (20 ~ 30分)

大津事件の対応について、政府と児島それぞれの思惑を考察する。立場によって対応が異なることから、それぞれの正義があることを学ぶ。その際、当時の世界と日本の状況をふまえ、理由を含めて、自分が支持する立場を決める。

2) 流れ・注意点・考察内容

①各自で政府と児島の思惑について考察する

政府：ロシアと戦争になってしまう。死刑にすることでロシアの怒りを和らげる。

児島：ころころと法律を変えてはいけぬ。外国にビビって法律を変えたら舐められる。

②問いかけやヒントも参考にしつつ、意見交換

授業内容も参考に以下の問いかけやヒントによって意見交換も活発になり、記入される内容が深まる。

- ・当時のロシアってどんな政策をとっていた？
- ・当時の日本が置かれた状況は？

- ・政府が小学生に流行らせていた歌の紹介「西に英吉利、北に露西亞、油断するなよ国の人、表に結ぶ条約も心の底は測られず、万国公法ありとて、いざ事あらば腕力の、強弱肉を争ふは覚悟の前の事なるぞ」。
- ・児島の発言の紹介「苟も法官は、憲法に保障せられたる独立不羈の国家機関たり。然も此不羈神聖なるべきものが、権門要路、否朋友の干渉甘言に迷誤して、卑屈の挙動を取て為し、職権を辱かして顧みざる如きに至りては、是れ国家百世の歴史に汚辱を染め出し、上天皇陛下の御敬威を瀆し奉るものにして不忠とや云わん、不信とや云わん・・・」、「裁判官の眼中唯法律あるのみ」、「服従すべきは唯法律のみ」、「国家の栄辱と憲法の権威の為」。

政府：南下政策を進めてシベリア鉄道を起工させるロシアと戦争をしては敗北する。条約さえも破る危険性があるロシアの感情を和らげるためには最低でも津田を死刑にする必要がある。

児島：政府首脳の圧力で法律を変えてしまったら、司法に対する信頼がなくなる。政府や外国の圧力でころころと法律を変える国、遅れた国と思われる。

③理由をつけて自分の支持する立場を記入する

机間巡視を行い、意見を読み上げたり、タブレットで撮影してプロジェクター等で全体に共有したりすると記入量が増える。また、最低3人以上と意見を交換する指示を出す。選択肢は二択だが、それぞれの個性が出る。

④全体で振り返り

意見をもとに、以下のポイントを伝える。

- 1：(大津事件での2つの異なる立場について) 政府は国を守るための対応をし、児島は法治国家として法を守るための対応をしたように、国家か法かの2つの正義の対立。
- 2：(当時の司法権の独立の弱さ) 政府の圧力で司法権が崩れる可能性があったように、当時の司法権の独立の弱さ。
- 3：(児島に対する2つの評価) 児島の判断によって司法権の独立が守られて国際的な評価を得たが、一方で児島が「干渉を排除するための干渉」を裁判官に行い、裁判官の職権の独立を犯した点。

3) まとめ

①歴史的意義の理解と時代像の捉え方

ロシアの南下政策やシベリア鉄道の起工、さらに小学生に流行らせていた歌からわかるように、国内にはロシアに対する恐怖心や警戒心があった。日本は欧米諸国に追いつ

大津事件は大事件だった！？～正義と正義の衝突～

1891年5月、ロシア皇太子ニコライが訪日中、大津で警備巡查津田三藏に切りつけられる。命の別状はなかったが、大騒動に。日本政府は、皇族に対して危害を与えたものに適用する大逆罪によって死刑にするように働きかけた。一方、大審院（当時の最高裁判所）の判断では、大逆罪は日本の皇族に対して適用されるものであり、外国の皇族に対する犯罪は想定されておらず、法律上は民間人と全く同じ扱いにせざるを得ないと主張。大審院長の児島惟謙は「法治国家として法は遵守されなければならない」とする立場から事件から、一般人に対する謀殺未遂罪（旧刑法292条）を適用して津田に無期懲役（無期懲役）の判決が下された。

政府側の言い分：『津田三藏巡查を死刑にする！！』
 児島惟謙の言い分：『法律上なら無期懲役です！！』
 この時の政府側と児島側のそれぞれの思惑とは、……

政府側の思惑：
 児島側の思惑：
 自分が支持する立場とその理由を説明せよ。
 自分は_____側を支持する。なぜなら



▲授業プリント

くための近代化を進めながらも不平等条約問題を抱えた状況であった。そうした中、大津事件によってロシアからの領土割譲要求や開戦もありうるという危機感があったからこそ、政府は司法権よりも国家・国民を守ろうとした。一方、不平等条約改正を目指す状況において、児島の行動により日本が法治国家として国際的に認められるなど、司法権の独立を守ったという評価がなされるが、児島が裁判を担当した裁判官に働きかけを行ったという点では裁判官の職権の独立を犯したといえる。

②立場で変わる正義の価値観を理解し、自分の答えを出す
 実生活でも立場によって行動や対応が変わるからこそ、政府と児島の正義を考察することに意味がある。児島が司法権の独立を守ったという評価はあるが、正解のない問いとして、説得力のある理由を付けて自分なりの答えを出す。「主人公は仲間のために大きな勢力に戦いを挑むが、その世界では大きな勢力がつくった秩序があり、主人公は仲間のためにその秩序を打ち破っていく。ここにもそれぞれの正義がある」といった身近な漫画の例などを伝え、「結果だけでなく、そこに至るまでも選択肢やそれぞれの思惑があった」ことに気づき、理解を深めやすくなる。

4. 実践例③風刺画は何を語る！？～風刺画を分析せよ～

1) ねらいと展開概要

①ねらい

絵画や風刺画などは授業で頻繁に使用されている。読み取りや考察をする使用例としては、「何も情報を与えず、『この画像から読み取れることは？』『この画像は何を表している？』等の問いかけにより、頭を柔らかくして発想・考察する方法」と、「文章による説明・解説力を高めるために、すでにある知識をもとに解釈し考察する方法」が挙げられる。今回は後者の方法で、授業内容の振り返りや、単元が終わってからの復習・内容の整理として、風刺画を題材とし、読み取れることやその背景に含まれる情報について考察する。授業内容を理解していれば、考察が比較的しやすく、さらに風刺画について説明することで、知識をもとにした文章力の育成にもつながり、論述対策にも有効である。

②展開概要（20～30分）

1880～1900年代の日本に関係する3枚の風刺画を題材に、当時の状況なども含めて考察し、知識をもとに文章化する。そして意見交換もしながら、より良い自分なりの解答を完成させる。

2) 注意点と考察内容

①朝鮮問題について

朝鮮をめぐる日清の対立と南下政策を進めるロシアについての授業内容を理解していれば取り組みやすい。ヒントとして、1887年に書かれたこと（『トバエ』1887年、ジョルジュ・ビゴー画）を伝え、日清が関わる壬午軍乱や甲申事変の後であることが理解できる。「登場人物がどの国を表すか」「どのような状況を表しているか」「どの時期の状況か」等に注意するよう指示を出すと記入が進む。

②日清戦争後の状況について

生徒は、最初は日露戦争だと思い記述するが、途中でヒントとして1895年に書かれたこと（『極東における古きイギリス』1895年、ジョルジュ・ビゴー画）と、日・英・露・独・仏が登場することを伝え、日英同盟前だが、日英通商航海条約や対露の観点から日本に好意的なイギリスと、露・独・仏の三国から三国干渉を思い浮かべて説明できる。授業で扱った「ロシアがシベリア鉄道の敷設を進めて東アジアに勢力を拡張することをイギリスは警戒して日本に友好的であった」、「極東での不凍港が必要なロシア、ロシアの極東進出で自国への脅威を減らしたいドイツ、秘密同盟もありロシアを支持したフランス」などの補足を加えると理解が深まる。また、それぞれの登場人物（国）のコメントを自由に考え、生徒が持つ抽象的なイメージを具体化できるようにしている。ただし、コメント活動については、おまけ的な要素が強いため、効果は未知数である。

③日露戦争について

ロシアとロシアの南下政策に対する利害が一致した日英同盟の対立という単純な構図ではなく、列強も含めたダイナミックな構図での理解が必要であり、②同様、日露戦争前の国際情勢を授業で扱っていれば、日英米 vs 露仏独の構図から日本を支える英米が読み取れる。アメリカについては、ポーツマス条約での仲介は生徒の意識の中にもあるので、さらにまとめの際に、授業で扱った「外国債での協力」や「ロシアの独占的な満州支配への警戒」なども補足として説明しておくことで理解が深まる。

3) 展開

①何もヒントなどを与えずに取り組む

有名な風刺画も多いため、多くの生徒が取り組む。

②ヒントを与える

- 1：授業で扱った内容を表していることを伝える
- 2：服装などから、ある国を表している、この国とこの国の対立って授業でやったよね（この段階でかなり記入が進む）
- 3：実際に題材としている語句などを提示する（ここまでする必要はないが、どうしても記入が進まない場合はおすすめ）



▲授業プリント

③自由に移動させて意見交換

他の人の視点や文章の書き方を参考にする。最低3人以上とワークシートを交換してサインをもらう指示を出すと意見交換が活発になる。時間がない場合は、両隣前後の席で交換するのが良い。そして各自でまとめ、最終的に文章を完成させる。この際、机間巡視を行って、良い意見を端末で撮影する。

④全体での答え合わせと振り返り

良い意見をプロジェクター等で全体に提示し、一緒に見ていく。その際、授業内容の復習や+αの情報を加えていき、生徒にはメモの指示を出す。

4) まとめ

①歴史的意義の理解と時代像の捉え方

それぞれの風刺画に取り組む際には以下のことを押さえるるとよい。

朝鮮問題については、征韓論や日朝修好条規に見られるように朝鮮を影響下に置きたい日本と、朝鮮を属国とみなして宗主権を主張する清が対立し、さらにロシアは不凍港を狙い南下政策を進め、朝鮮は国外からの影響も受けながら、閔妃派の改革・壬午軍乱・甲申事変が起こっていた。

日清戦争後については、ロシアを警戒したイギリスは日本に好意的で、日清戦争直前に日英通商航海条約に調印し、三国干渉に対して中立的立場を取った。一方で、極東での不凍港が必要なロシアは、日清戦争での日本の勢力拡大に対して、ドイツとフランスを誘い三国干渉を行う。その結果、日本国内で「臥薪嘗胆」の合言葉が叫ばれ、政府は次なる戦いに備えて軍備拡張と国力の充実を図っていく。

日露戦争については、開戦直前の国際情勢は日英米と露仏独の構図があった。イギリスは東アジアで勢力を拡大させるロシアに対する危機感から「光栄ある孤立」を捨て日英同盟を結び、アメリカはロシアによる満州独占の支配への警戒から日本に好意的であった。しかし、アメリカは日露両国の勢力均衡を望んでおり、そうした思惑がポーツマ

ス条約仲介の一因でもあった。このように、日本を取り巻く状況は、列強の思惑が渦巻き、極東と呼ばれた東アジアにおいて、弱肉強食の非常に緊迫した時代だったといえる。

②風刺画の読み取りについて

今回は風刺画を題材に、知識を材料として文章化することで授業内容の復習・整理を行った。生徒のレベルに応じて、字数の指定等々臨機応変に対応できる。

5. 実践例④戦後日常大混乱！？～平和はすぐには訪れず～

1) ねらいと展開概要

①ねらい

アジア・太平洋戦争と戦後の悲惨さについては生徒もある程度のイメージを持っているが、戦争を経験した世代が減り、当時についての生の声が聴けなくなり、戦争と戦後がまさに過去の歴史になっている。授業では占領政策・民主化改革の説明に時間を割くこともあり、当時の社会状況については「イメージもあるし、時間もないし」と流されてしまう場合が多い。しかし、悲惨さと戦時中の統制からの解放が入り混じる戦後を様々な角度からイメージするのは難しい。新学習指導要領の影響もあり、現代史と自分史の重要度が増す中で、資料や問いかけを交えつつ、当時の人々の状況から戦後を考察する。戦時中の復習かつ戦後の導入としてのALでありつつ、祖先が経験した歴史として親近感を湧きやすくし、この時期のエネルギーがその後の復興と高度経済成長期へ繋がっていくことを理解する。

②展開概要 (15～25分)

関連し合う3つの問いに対して、生徒が持っている知識(小中学校で習ったり自分で得たりした知識)と授業内容をもとに、関係する資料やヒントを与えて取り組む。当時の状況を考察し、戦争の傷跡が戦後の悲惨な状況を生み出し、混乱した時代であったことを理解する。

2) 注意点と考察内容

①主婦への質問から供給不足について問う

戦後、復員と引揚げが進み、外地にいた軍人350万、民間人310万の計660万のうち、630万が帰国した。戦時中の統制からの解放も重なり、人々の需要は増加するが、原爆によるものを除いても、空襲被害は焼失・破壊家屋約240万、戦争全体の罹災者数は約875万に達した。戦時中の経済統制は戦後も継続されたが、食料は遅配・欠配続きで衣料や日用品が不足した。供給が追いつかない中、各地に闇市が生まれ、悪性のインフレが進行した。生徒が空襲の知識などを持っているため活動は進むが、資料に加えてヒントを与えるとより重大さが伝わりやすい。

・上野公園で餓死者が累々と横たわっており、上野駅は浮浪者や孤児で足の踏み場もなく、地下道には新聞紙をかぶせた餓死者の死体が並んでいた。労働力の不足や肥料農機具の欠乏で農業生産は最低水準に落ち込み、米の収穫高は明治以来最低の数字になっており、1,000万人の餓死者が予想されていた。

・人々が帰国して需要が増加した。空襲で物が不足しているし、工場が焼けて物が作れない。戦争が終わりみんな好きなものを食べたい。闇市でぼったくり商売が行われる。

②元軍人への質問から失業者について問う

空襲による工場施設の破壊や閉鎖、復員、引揚げなどで失業者があふれていた。敗戦と同時に軍需工場は一斉に首切りを行い、その数は10月下旬までの二か月間で410万に達した。また、海外だけではなく、日本本土にいた430万以上の兵士の復員も進んだことで、720万の軍人が一部海外残留者を除いて復員し、失業者の仲間入りをするなど、1945年秋の失業者数は1,400万人といわれている。

・海外から帰ってきてても仕事がない。軍人が無職になった。空襲で工場がないから仕事がない。武器を作る工場の注文がない。戦争が終わって経営もままならないからリストラされた。

③政府関係者への質問からインフレについて問う

敗戦と同時に政府は巨額の軍需補償金を資本家にばらまき、軍人軍属への退職金などの臨時軍事費が支出され、占領軍の要求に伴う政府支出も膨大となり、日銀券の発行高が増加して急激なインフレが進んだ。①での極端な物資不足とも関係し、東京の小売物価指数は敗戦後の半年で3倍となる。この問いには幣原内閣の政策も関係するが、それはその後の授業で扱う。

・戦争中って何を作ってた？軍人が辞める時って何をあげないといけない？とにかく政府は何が必要？

・戦後は復興のためにお金が必要なので大量に発行したから。戦ってくれた軍人に退職金を払わないといけない。戦争中に作った武器の支払いがあげつない。

3) 展開

- ①資料を配布し、各自で取り組む
- ②自由に移動させ、意見交換
- ③全体での答え合わせと振り返り

戦後日常大混乱！？～平和はすぐには訪れず～

戦後直後の人々にインタビューを行ったところ、様々な声が聞かれました。以下の質問に対する理由を考えてみよう！

質問その1 電報に乗って買い物に向かう主婦A
質問 「戦争が終わりましたし、新しい生活はどうか？」
主婦A 「めちゃくちゃ大変！何となく物がない！不足している！甘いものでも食べたいね、」
理由

質問その2 お酒に酔った元軍人男性A
質問 「戦争が終わりましたが、今はどんな仕事をしているんですか？」
男性A 「ういへ、ヒック、街中に失業者があふれてるよ、ヒック、俺もどの仕事をしようか、」
理由

質問その3 財務に詳しい政府関係者男性B
質問 「お忙しいと思いますが、どういふ状況でしょうか？」
男性B 「とにかく日銀にお金を発行してもらってるよ！戦争中の借金もあるし、さあどうするか、」
理由

▲授業プリント あわせて参考資料も提示した。

- ・写真（復員した兵士、帰国者、バラック、空襲による被害）
- ・グラフ（戦後の通貨と物価）、表（闇市場の価格と基準価格）

4) まとめ

①歴史的意義の理解と時代像の捉え方

戦後は悲惨な状況の一方で、街角に流れる「リンゴの唄」や地方での青年団の活発な活動など、戦時中の統制からの解放という二面性を持っていた。授業が進むたびにこのALに触れることで、その後の復興と高度経済成長期の歴史的意義が理解しやすくなる。イメージと知識から活動は活発になりやすいが、活動の広がりや深い学びのためには、ヒントや問いかけが重要となる。

②復習と導入の2つの要素を持つAL

戦時中の復習をしつつ、「こうした状況だからこそ、政府はどのような政策をしていたのか」という戦後政策の導入にもなる。また、イメージしやすい過去の歴史でありつつ、自身の祖先が経験したという自分史の流れのひとつとして、取り組んでもらいたい。

6. おわりに

「ALをする時間がない」、「活動や考察は学力につながるのか」、日本史授業ではまだまだそうした意見も多い。それでも21世紀型の生きる力を伸ばすため、今後は生徒のアウトプットの割合をより増やしつつ、一斉講義とALをバランス良く、良い意味で”中途半端”なハイブリッド型授業を続け、そして生徒が「過去から学び、未来に活かす」授業を追求していきたい。また、新型コロナウイルスの流行に伴う休校により本校でもリアルタイムのオンライン授業や動画配信など、ICT化が急速に加速した。それに伴う悩みや問題もあるが、「ピンチをチャンスに」という言葉が表すように、この期間だからこそその発見や手応えも多くあった。この経験から学び、アフターコロナ（ウィズコロナ）において生徒がより良い学びに向かえるよう、アナログの良さやデジタルの良さをいっそうハイブリッドさせていきたい。

参考文献・資料

- ・大門正克『全集日本の歴史 15 戦争と戦後を生きる』2009, 小学館
- ・北河賢三『戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』2000, 青木書店
- ・小松裕『全集日本の歴史 14 「いのち」と帝国日本』2009, 小学館
- ・清水勲『ビゴーが見た日本人』2001, 講談社
- ・ジョン・ダワー著 三浦陽一・高杉忠明訳『敗北を抱きしめて 上・下 増補版 第二次大戦後の日本人』2004, 岩波書店
- ・田畑忍『児島惟謙』1987, 吉川弘文館
- ・遠山茂樹『日本近代史Ⅰ 岩波全書セレクション』2007, 岩波書店
- ・野村義文『天津事件 露国ニコライ皇太子の来日』1992, 葦書房
- ・原田敬一『日清・日露戦争 シリーズ日本近代史3』2007, 岩波書店
- ・藤木久志編『戦国大名論集 17 織田政権の研究』1985, 吉川弘文館
- ・藤原彰『日本近代史Ⅲ 岩波全書セレクション』2007, 岩波書店
- ・マイケル・サンデル著 鬼澤忍訳『これからの「正義」の話をしよう：いまを生き延びるための哲学』2010, 早川書房
- ・山田邦明『Jr. 日本の歴史 4 乱世から統一へ 戦国時代』2011, 小学館
- ・吉田裕『兵士たちの戦後史』2011, 岩波書店
- ・吉見義明『焼跡からのデモクラシー 草の根の占領期体験（上・下）岩波現代全書』2014, 岩波書店

地理総合へ向けた「国際理解と国際協力」の授業実践 ～生徒の主体的・対話的で深い学びを目指して～

桜美林中学校・高等学校教諭 西 克幸

1. はじめに

新学習指導要領の告示を受けて、2022年度から始まる「地理総合」の具体的な中身を各学校や教員が模索し始めている。高校の教育現場からすると、地理Aから地理総合へといかにスムーズに移行していくかが課題となろう。本校においては、地理Aを高校1年で必修修としているため、生徒全員が地理を学ぶ機会があり、現行の地理Aで行っていることを精査し、足りない部分を加えることで地理総合への移行を図ろうと準備している段階である。

新教科の「地理総合」では、「国際理解と国際協力」が学習の柱の一つとなっている。これは現行の地理Aの「世界の生活・文化の多様性」「地球的課題の地理的考察」の部分に継承し、発展させた分野であると考えられる。本校はユネスコスクールとして活動しているものの、国際理解教育は外国語科の中に取り込まれており、地歴公民科ではさほど力を入れてこなかった。そこで、2018年度にJICA東京主催の教師海外研修（ザンビア）に参加する機会を得たことを契機として、地理Aの中の「地球的課題と私たち」という分野を、地理総合の「国際理解と国際協力」の中でも展開できるように授業実践を試みたので紹介したい。

2. 「互いの力で理解する」授業を実践する

(1) 授業実践

教師海外研修で得たものを中心に、「地球的課題と私たち—世界の人口問題・都市居住問題—」と題して、2018年10月～11月に6時間、地理Aの授業として高校1年の3クラスで授業を行った。

今回の一連の授業で「生徒の主体的・対話的で深い学び」を促進させるために、グループ学習や知識構成型ジグソー法（以下ジグソー法）・フォトランゲージなどを利用したアクティブラーニングを積極的に導入した。これらを通して、教師から生徒へ一方的に授業を行うのではなく、クラス全員が考え、話し合いに参加し、互いの力で理解する授業を構築したいと考えた。そのため授業の最初に「これから行う授業は、正解・不正解はありません。自分が考えたことを素直に答え、人の意見を聞き、意見をまとめていきましょう。」ということを生徒に伝えた。

① 1時間目—ザンビアの基礎知識とSDGs

ザンビアという国名を初めて聞いた生徒も多く、地図帳で位置の確認をすることから始めた。人口や国民総所得などの基本事項を日本と比較しながら教え（図1）、銅に支えられた国であることを学習した後に、SDGsについて学

んだ。高校入学までにSDGsについて学習したという生徒は1割を切っていた。その多くは学校の講演会でSDGsという言葉を知りただけで、SDGsについての詳細はあまりよくわからないと回答した生徒がほとんどであった。このように、SDGsは2030年までの世界各国の開発目標であるにもかかわらず、その認知度は低い。地理総合には、2030年までにSDGsを達成するための具体的な実践を展開し、その結果を共有しながら「誰一人取り残さない」というSDGsの理念を普及させる使命があると考えられる。

図1 1時間目で使用した日本とザンビアの比較

	日本	ザンビア
人口	1.25 億人	1,709 万人
平均寿命	83.8 歳	60.8 歳
	男 80.8 歳 女 87.1 歳	男 58.8 歳 女 62.9 歳
国民総所得	555 兆円	2 兆 7 千億円
国民総所得 / 人	439 万円	16.8 万円
乳幼児死亡率	2.0‰	43‰
合計特殊出生率	1.46 人	5.28 人
自動車保有率	2.1 人 / 1 台	75 人 / 1 台
第 1 次産業	3.4%	52.2%
第 2 次産業	24.3%	9.5%
第 3 次産業	70.7%	38.3%

二宮書店『データブックオブザワールド』より筆者作成

授業の最後に、SDGsの17の目標の一つである「1. 貧困をなくそう」を取り上げて、貧困とは何か？考えさせた。貧困と聞いて、アフリカやアジアの貧困をイメージした生徒が大半であった。しかし、実際には発展途上国だけではなく、先進国にも貧困は残っている。2019年の日本のSDGs達成度（図2）を見ても、「1. 貧困をなくそう」は部分的に課題がある黄色が使われている。そのことを生徒に話すと、日本にも貧困はまだ残っていることに気付いてくる。生徒の感想の中に、「日本には貧困はないと思ったけれど路上生活者もいるし、礼拝の献金や献米も貧しい人にわたっている。先進国って？と考えさせられた」というものがあつた。SDGsや発展途上国を扱う場合、どうしても日本（私たち）には関係なく、どこか遠い国の話しになりがちである。SDGsにおいて日本が目標を達成できているのは「4. 質の高い教育をみんなに」と「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」の2つだけであり、多くの目標は未だ達成されていない。そういう意味でSDGsは、身近な所に視点を置きながら他国を見ていく教材として優れていると感じられる。

図2 2019年日本のSDGs達成度



『SUSTAINABLE DEVELOPMENT REPORT 2019』より引用

1 時間目の生徒の感想

- ・この時代にまだ平均寿命が20歳以上も差がある国があるんだなと思った。これにHIV/AIDSが大きく関与していると初めて知った。
- ・銅の価格が上がるとGDPも上がる。モノカルチャー経済という言葉の意味が分かった気がする。
- ・貧しくても幸せな人もいるし、お金があっても精神的に満たされない人もいる。貧困ってなんだ？

2 時間目・3 時間目—フォトランゲージ

2時間目は、ザンビアの写真を使用して現地のイメージをつかむ授業を行った。フォトランゲージで用いた写真は、「水」「学校」「病院」「都市と田舎」「トイレ」「銅」「感染症」「子ども」のテーマのもと私がザンビアで撮ったものを用意し、その写真を各班(4名)に配付した。生徒にはテーマを伝えず、個人で1枚ずつ写真の読み取りをし、班ごとにその写真から考えたザンビアの問題点を話し合わせ、最後に写真のタイトルを決めさせた。

3時間目は、前時の2つの班を1グループとして、6枚の写真からザンビアの課題を探らせ、最後にそれぞれの班にザンビアの問題点のキーワードを決めさせた。この活動によって、ザンビアのイメージを深めていったように感じられた。短期間でその国のイメージをつかませるにはフォトランゲージは非常に良い手法であると思う一方で、一面的な事象しかつかませていないのではないかという課題も浮かんできた。

生徒がフォトランゲージから読み取ったキーワードを見ると、私がザンビアで感じた問題点と同じものが多かった。

フォトランゲージから生徒が導いた ザンビアの問題点を示すキーワード

「モノカルチャー経済」「経済格差」「技術不足」「教育の格差」「貧富の差」「習慣の改善」「設備の差」「地域格差」「衛生状態」「感染症」「医療技術」「不均等な水」「人口増加」

2・3 時間目の生徒の感想

- ・ザンビアでは、今でも足りない部分が多くあることが分かった。海外企業が進出して栄えるところもあるが、一方で貧しい地域もある。一番の問題は地域による貧富の格差だと思うのでそれを改善するべきだと思った。

・日本とザンビアとで「当たり前」には大きな違いがあり、国々どうして当たり前の基準の違い(格差)を縮めることが、本当の意味での平等であり、各国が目指す最終地点だと思った。



▲フォトランゲージで用いた写真の一部

(左) ザンビアのトイレ事情 (右) ポスターで知る感染症

3 4 時間目—発展途上国の人口増加の諸問題

4時間目は発展途上国の人口爆発で起こり得る諸問題について教科書を用いて授業した。教科書中に出てくる人口転換の仕組みを教え、なぜ途上国で人口爆発が起こるのか。それに伴って引き起こされる様々な問題を考えさせた。さらに、ザンビアで撮った2枚の写真を用いることで生徒達の興味関心を引いた。ザンビアでは、すでに人口増加による問題が多く見られた。例えば、首都のルサカ市にあるカニヤマヘルスセンター(12人の医師が働く病院)の産婦人科では1日に約20人の分娩を行い、1カ月で約600人の子ども達が生まれてくる。この病院の待合室は妊婦で一杯で、待合室に入れない人たちが列をなしていた。病院の壁には「Child marriage? Not my dream!」という少女のポスターが貼ってあり、これらを用いながら人口の急増と前時で行ったフォトランゲージをつなぎ合わせザンビアの課題を考えた生徒も多かった(下の写真)。



4 時間目の生徒の感想

- ・発展途上国では、早期結婚などで出生率が高まり、その結果、子どもが増えると学校などの設置や教師の手配などが追いつかず教育の質が悪くなったり、失業者が多くなったりとたくさんの問題につながると分かった。
- ・一つの題材から派生するたくさん問題が出てきて、問題と向き合っていく重要性を痛感した。個別の問題がよく見ると人口爆発に繋がっていることを考えると、解決するためには多くの力が必要と感じた。
- ・現地の人が自力で出来る技術・教育支援が必要だと思った。お金の支援も大事だが、技術や教育の支援も必要。

④ 5 時間目ー人口増加とコレラから考える

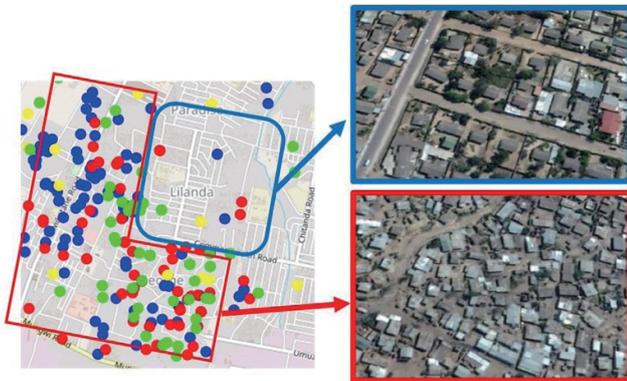
5 時間目はジグソー法を用いて、「ルサカ市のコンパウンド（スラム）で起こったコレラ発生の原因」を探らせた。さらに、人口の急激な変化で起こる様々な現象をザンビアだけでなく、日本の都市（東京の都市型水害）と地方（秩父市の水道問題）で起こる問題を例に挙げ、人口増加期の発展途上国だけでなく、人口減少期の先進国にも多くの問題があることを考えさせた。

ジグソー法を用いた授業

問い：コレラ発生の原因を探ろう！

（エキスパート活動）

(A) ルサカ市で発生したコレラの分布

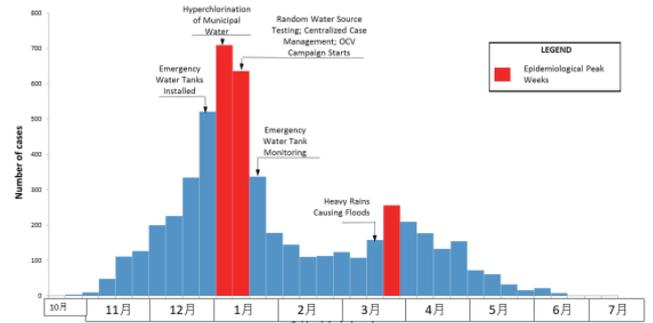


※丸の色は気にしなくてよい。

生徒の考え

- ・コレラの発生が少ないところは、家が整然と並んでいる。整備された街並み。木が多い。道路が広い。家と家の間が離れている。お金持ちの家か？
 - ・コレラの発生が多いところは、家の並びがバラバラで数も多い。密集している。大きな道路が少ない。道が分からない。木が少ない。貧しい地域。水道はないのでは？
- ※公衆衛生の差がコレラの発生数の差になっている。

(B) ルサカ市におけるコレラ発生時期



生徒の考え

- ・南半球の雨季にあたる 12 月～ 1 月にかけてコレラの発生数が多い。乾季の 6 月以降は発生していない。非常用の貯水タンク使用後や塩素消毒後はコレラが減少しているが、洪水が起こるとまた増加している。
- ※雨季など水が多い時期にコレラが発生している。

(C) ルサカ市におけるコレラの発生場所の写真

（この 2 つの写真の場所はすぐ近くである。）



生徒の考え

- ・左の写真は、井戸が木材で隠されているようだ。バケツは水を汲むものであろう。未整備の場所。
 - ・右の写真は、トイレらしき建物の横に水場がある。子どもが手に触れられる水場のようだが飲めるのだろうか？
- ※井戸や水場の近くにトイレがある。このトイレの汚物が井戸や水場に流れ、コレラが発生する。



▲研究授業でのエキスパート活動の様子 生徒が互いの意見を活発に述べ、図や写真から分かることをまとめていく。

(ジグソー活動)

エキスパート活動で得られた情報をもとに班（3 人）ごとに、問いの答えを考えた。その後、コレラ発生のキーワードを発表させた。

(A)・(B)・(C)の図から考えた生徒の問いの答え

- ・下水処理をしていない水や生活排水が、井戸や水場にそのまま入る。それを飲むとコレラにかかる。
- ・大雨が降り、洪水や氾濫がおこり、汚染された水が生活用水として使われる。共同の井戸などを使用した人たちがコレラにかかり、さらに周辺へと広がっていく。
- ・家が密集していたり、水道がなかったりして、雨季で土地が水浸しになると、トイレのふん尿が流れ出す。結果として、これを使用することになるのでコレラに感染する。さらに周囲の人々にうつり、多くの人達が簡単に感染していく。整備されている町では水道があり、コレラに感染する人が少ないのではないかと思う。

生徒達のコレラ発生のキーワードから、このような問題が起こる原因は何か？と質問をしたところ、「急速な人口の増加であらゆるものが間に合っていない」との答えがあった。

生徒が答えたコレラ発生のキーワード

「雨季」「汚水」「排水の再利用」「下水処理」「生活排水」「密集」「コンパウンド」「人口増加」「貧困」「衛生状態」「整備不足」「トイレ」「井戸」「水道がない」

生徒の答え

背景にあるのは、急速な人口の増加

そこで、私から「急速な人口の変化が原因となる他の問題はありますか？」と質問をした。最初は、「ストリートチルドレン」や「教育が受けられない」「食糧不足」などと答えていた生徒達だったが、「超高齢化」と言った生徒の声で流れが変わった。私の質問は「急速な人口の増加」ではなく、「急速な人口の変化」であった。そこに生徒達が気付いたのである。その後は、「多摩ニュータウンの高齢化」や「限界集落」、「労働者不足」など日本の社会問題がいくつもでてきた。SHRで読んでいた朝のコラムにあった「秩父市の水道管問題」を挙げる生徒もいた。

生徒達は、この授業からザンビアの問題だけではなく、自分達の近くにも多くの問題があるということを再認識できたようだ。急速に人口が増加するザンビア、そして生徒達が生きる時代に急速に人口が減少する日本、それぞれに問題を抱えていることを生徒達に伝えた。生徒の感想文からは一連の授業の中で最も伝えたかったことを、生徒一人ひとりがしっかり理解できたようであった。

5 時間目の生徒の感想

- ・人口増加と人口減少はそれぞれに多くの問題がある。日本は将来人口が減少するのが分かっているのだから、今のうちから対策を立てておく必要がある。国と国とで技術を共有することはとても有効で、交流や支援が進めば世界はもっと発展するはずなので国際的な支援の重要性が分かった。
- ・今、日本に起こっている問題は、将来、どこかの国が経験する問題かもしれないと思うと、世界は見えない糸のようなもので強く複雑に結びついていると思った。急速な人口の変化によって起こる問題と言われて、発展途上国のことしか浮かばなかったが、日本のような先進国にも多くの問題があると思った。互いに協力することの大切さを感じたし、世界の問題について考えるきっかけにもなった。
- ・今の日本の問題を解決することは、将来先進国化してくるかもしれない発展途上国のためになる。だから私たちが身近な問題の解決策を編み出すことがどれだけ重要なかが分かり、驚いた。格差の問題からいろいろな課題がでてくる。発展途上国だけでなく、先進国もまた格差は無関係ではなく、自らの問題だと思って生活するべきだと思った。
- ・今日の授業でザンビアにある水問題は発展途上国だからというわけではなく、形はかわるが先進国にも日本にもあり、無関係ではないと知った。今、ザンビアにある問題はいずれ日本に起こるかもしれないし、その逆も言える。日本の問題を解決できれば、きっと将来ザンビアなどの発展途上国にも役に立つ。

⑤ 6 時間目ー地球的課題を解決するために

6 時間目はザンビアと日本のSDGsのダイヤモンドランキング表を作成させた。この表からザンビアの得意分野は日本に足りておらず、日本の得意分野はザンビアに足りていないことがわかり、相互協力することが大切であることを考えさせた。また、ザンビアで活躍する日本人からのメッセージを動画で紹介し、感想を書いてもらい授業を締めくくった。

(2) 地理を専門としない教員の反応

2018年の実践をもとに、2019年には高校1年の地理Aの全クラスで「国際理解と国際協力」についての授業を行った。昨年は6時間授業だったが、SDGsに関する授業時間の不足やコレラについての知識が私にも生徒にも不足していたのでその点を補足し、2019年10月に9時間の授業を行った。

本校の地理Aは、私を含んだ専任2名と非常勤講師3名の計5人で11クラスを教えている。地理学を専門に学んだ者は私一人で、哲学、日本文化、東洋史、特別支援などを大学で学んできている先生方で構成されている。多くの学校が本校のように、地理のプロパーが少ない状況であ



◀ジグソー活動の様子

▶ダイヤモンドランキングの作成

ろう。地理総合が必修となり、地理教員を育成することは急務である。一方で、地理を専門としない先生方どのように地理総合を進めていくかが大きな課題であろう。今回、授業実践の感想を書いて頂いたので紹介したい。

国際理解教育を実践したことについて

- ・国際社会の一側面の現状を理解する上では机上の学びだけでなく、発展途上国を取り上げて日本と比較することが大切である。
- ・日本における貧困や食料廃棄の問題などは生徒に大きな衝撃を与えていたようでした。
- ・資料が多く、生徒も興味関心が持ちやすい内容だった。
- ・生徒が自ら考え、それを自分の言葉で表現する時間を取れたことは、生徒の主體的な学びを考える上でも意義があったと思う。
- ・生徒一人ひとりの関心によって考え方も大きく異なり、現代社会の課題に対する生徒同士の様々な考えを共有することができた。
- ・生徒が興味を持って主体的に取り組んでくれたが、グループワークでは奇想天外な答えによって振り回されることもあった。しかし、考える力はつくと思った。
- ・系統的な学習の中でも常に日本と世界という視点は忘れずに紹介していきたいと思った。
- ・卒業論文を書くにあたって調査したインドネシアをもとにした授業を実践してみたい。

教師から見た生徒の変容について

- ・日本と発展途上国を比較すると日本の方が全ての点で上だと思っていたようだが、日本にもまだまだ課題があり、自分達に何ができるかを真剣に考えていたので、生徒達の中に何かが残ったのではない。
- ・文章を書くことが苦手な生徒も多い中で、しっかりと考えて自分の意見を書けるようになったのは、生徒の大きな成長だと思う。
- ・この授業の次に、東南アジアの地誌に関して授業したが、生徒達がより真剣に話を聞くようになった気がする。遠い世界の出来事が日本と無関係ではないということが十分に理解できていたようだった。
- ・生徒の中には、「ザンビア＝発展途上国→アフリカ＝貧しい」という感じで考えが偏りがちになるので、より幅広い視点で世界のことが紹介できればと思う。

先生方の感想を読んで話してみると、今回の授業に手ごたえを感じていた。4時間目は教科書を用いた時間をとったが、それ以外の時間は、先生方にはファシリテーターとして、授業を進める役割を担ってもらった。最初は授業がうまくできるか心配だったようだが、生徒達が積極的に話し合い、自分達で答えを出していく姿に驚いていた。このようにジグソー法やフォトランゲージを用いた授業は、地理を専門としない先生方にも受け入れられ、自分の専門分

野をそこに加えることでさらに地理の授業をよくしていこうという姿も見られ、非常に前向きな取り組みとなった。

(3) 積極的に参加してほしい教師海外研修

JICAの教師海外研修は、1965年に海外移住事業団（JICAの前身）の実施する移住事業の理解促進のための視察研修として開始した歴史ある研修である。現在は学校現場での開発教育・国際理解教育の推進を目的とし、JICAの全国の国内拠点を実施している。毎年、約170名の教員を約20カ国に派遣し、これまでに約3,000名が参加し、国内研修と海外研修を通じ、世界が直面する開発課題及び日本との関係、国際協力の必要性に対する重要性を認識し、参加教員は学校現場等での授業実践を通じ、開発課題を自らの問題としてとらえ、主体的に考える力、またその根本解決に向けた取り組みに参加する力をもつ児童・生徒を育成することを目的としている。今までに多くの地理の先生方も参加している。私が参加してみて、小中高校の先生方と行動を共にすることで、新たな視点、新たな授業の切り口が見えてくると感じた。また、地理総合は「国際理解と国際協力」を扱う教科であるので、日本の国際協力の現場を実際に見て、それを還元することで授業の幅もさらに広がると思う。

3. おわりに

ザンビアに近いルワンダでは、悲劇的な内戦を経て現在は世界が注目するICT立国へと姿を変えようとしている。この授業の最後には、2100年の都市人口ランキング表を見せることにしている。その表のベスト20の中にアフリカの都市が13入り、中国の都市は1つもない。このように世界は大きな変化を迎える。この時代を生きていく生徒達の学ぶ地理総合を、どのように教え、どのような形で進めるかは大きな命題である。生徒達の生きる時代は、複雑で不透明で正解のない世界であろう。そのために「主体的・対話的で深い学び」の中から、自らの意見を言い、他者の意見に耳を貸し、より良い答えを導き出す過程を経験することは生徒の成長にもつながるのではないだろうか。本校の地理総合もこれから試行錯誤を続け、持続可能な社会づくりに貢献できる生徒を育てられるよう魅力ある授業としていきたい。

参考文献・資料

- ・JICA ザンビアの提供資料（WHO ホームページ、Zambia cholera outbreak situation reports を修正加筆。https://www.afro.who.int/countries/zambia/situation-reports/cholera）
- ・独立行政法人国際協力機構東京国際センター（2019）：『教師海外研修報告書～「持続可能な社会の創り手」を育てる授業実践集～』
- ・ベルテルスマン・持続可能な開発ソリューションネットワーク（2019）：『SUSTAINABLE DEVELOPMENT REPORT 2019』

地歴最新資料 第25号

88288H07



教育図書出版

第一学習社

2020年6月1日発行

ホームページ <http://www.daiichi-g.co.jp/>